東京蜘蛛談話会
談話会通信
2020年
10月25日
No. 160

2020 年度の東京蜘蛛談話会行事

採集観察会，合宿，例会は，すべて中止といたします

入退会は：

事務局　初芝伸吾　〒186-0002 東京都国立市東 3-10-8
コンフィデンス高垣 105 有限会社エコシス
E-mail：hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

通信原稿投稿先：

谷川明男　〒247-0007　横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416
E-mail：dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp
通信の原稿締め切りは，4 月末，8 月末，12 月末です.

KISHIDAIA 原稿投稿先：

谷川明男　〒247-0007　横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416
E-mail：dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp
ファイルサイズが大きくてメール添付できない時には，ドロップボックスやグーグルドライブの転送機能・共有機能や，宅ふぁいる便やデータ便などの転送サービスをご利用ください．（これまで利用していた Yahoo Box は，アップロード機能を廃止してしまいましたので利用できません．）
キシダイアの原稿締め切りは，6 月末日と 12 月末日です.

東京蜘蛛談話会の会費は，一般 2000 円，学生 1000 円です.

（会計状況の好転により，2015 年度分より当分の間，会費を値下げし，年会費を一般会員 2000 円，学生会員 1000 円とします．）

会費は郵便振替口座　00170-8-74885　東京蜘蛛談話会へお願いします.
会費のことは：会計担当　須黒達巳
〒150-0013 渋谷区恵比寿 2-35-1 慶應義塾幼稚舎
TEL：080-5683-2765　E-mail: t.s.schlegelii@gmail.com

多摩だより（2）刈寄山のコガネグモダマシ

新　海　　明

勤務している塾で永らくお付き合いしていた同僚が病気で亡くなり，八王子の郊外にある霊園を訪れた．帰りしなに酒好きだった故人をしのび，皆で一献を五日市の旗亭で傾けることにした．古民家を回収した数寄を凝らした料亭の道路際の塀に見覚えがあった．

かつて，中高生の頃に部活で五日市の刈寄山に行った際，秋川渓谷に沿う広大な敷地を竹垣で囲った邸宅のたたずまいを見て驚き，この古い町の豪商の別邸かと思った場所にその料亭が位置していたからだ．「あぁ，そういえばここを通って刈寄山に何回か通ったことがあったなぁ」と．

刈寄山は知る人ぞ知る，都下秋川にある戸倉三山の一つだ．当時は五日市の駅から歩いて向かった．町を貫く街道は，今のように拡幅整備されていない時分で，江戸明治から続く黒塗りの漆喰の古民家がずらりと立ち並んでいた．特に印象に残っているのは，初夏になると燕が数千と思われるほど飛び交っていたことだ．燕も古より連綿と泥の邸宅を店の軒先に構えていたのだ．五日市にはこの数の燕を養うだけの虫たちもいたことになる．そしてクモも．

古い街並みを抜けると街道は二つに分かれた．刈寄山は左手に折れる道をたどる．そして，さらに車道をはずれ砂利道の林道に入れば，あとは渓流沿いを歩いて刈寄山の登山口に着く．ただ，この道のりはかなりの距離があった気がする．当時は石材を運搬するトラックとよく行き違い，採集するには結構危ない林道だった記憶がある．

私たち生物部クモ班の採集は車道を離れ砂利道の林道の入り口から始まり，刈寄山の登山口までの道沿いで行われた．山登りも何度かやったが，急峻な登山道は意気盛んな中高生ですら息が上がり，クモ採集どころではなくなってしまった．山頂を超えて今熊神社へと続く尾根道にはカネコトタテグモがいた．兄が見つけたときは「東京都の初記録だ」と言っていたのを覚えている．だが，この尾根道までたどり着いたのは 1 度きりだった．採集は川沿いの林道で打ち止めとなって，五日市の駅に引き返すことが多かった．

この林道で採った思い出の一品はコガネグモダマシだ．昼間の調査だったにもかかわらず，林道わきの雑草が生い茂った河原の背丈の高い草に円網がかけてあった．その中央にクモの姿があった．目を凝らすと，当時のクモ初心者の私には「徘徊性のシャコグモが円網を張っている！」と見えた．同じような思いでコガネグモダマシと初めて出合った方も結構いるのではないだろうか．

今でこそ，コガネグモダマシの仲間は何種類も記載されているが，この頃は誰も間違えようもないクモだった．コガネグモダマシをまとめた谷川さんによれば「ちょっと見

ただけでも区別できた新種」が「永らく記載されずにいたことが不思議」だという．彼によれば「まだまだ未知のクモがたくさんいる」ことを知り「面白い」と思って，クモ研究にのめりこむ契機となったクモがコガネグモダマシだったという．私は「わかりやすかったコガネグモダマシが７種類にもなって困ったもんだ」と冗談めかしてよく言った．すると「いえいえ，こんなに簡単に見分けられるのに認識されていなかったことに驚いた」「自然界にこれだけのコガネグモダマシの仲間がいただけのことです」と言い返された．

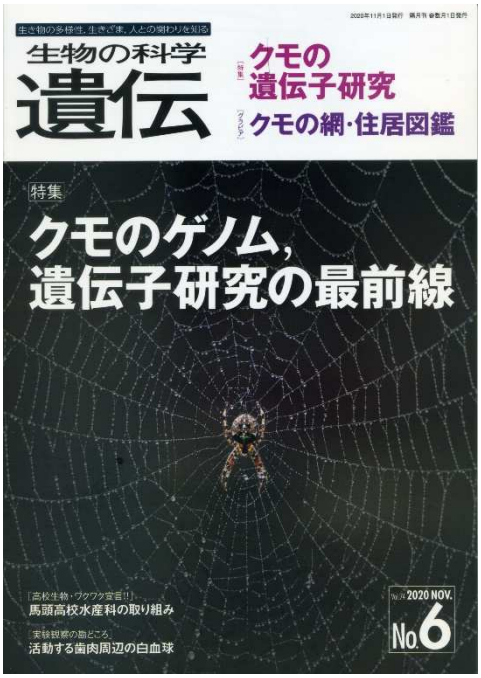
それまでの常識を疑い，常に「本当か」と注意深く表徴を観察し，さらに分岐分析やDNA などの新たな手法を試してみようとする姿勢は，その後，西表島から始まる琉球列島のクモ類の見直しや幾多の新種の発見記載につながり，さらにキムラグモやイソコモリグモの地理的種分化の解明さらに種とは何かを巡る問題の追求などの業績を生み出した．谷川さんのこのような研究の出発点がコガネグモダマシだったのだ．

今もたまにコガネグモダマシを見かけると，思いは懐かしい刈寄山の林道へ飛び，さらにこれが谷川さんの原点か・・・との感慨にふけさせてくれるクモである．

新刊紹介

「がろあむし」
舘野 鴻著
ISBN: 978-4-03-437080-3 C8745
40p.　偕成社
2200 円+税

いろいろな土壌動物が登場する．また，主人公のガロアムシは，最後にヤチグモのなかまに捕食されて生涯を閉じる．



生物の科学　遺伝
2020 年 11 月発行号　Vol.74 No.6
エヌ・ティー・エス
ISBN: 978-4-86043-640-7
1600 円+税
巻頭グラビア　これもクモの巣!?―クモの網・住居図鑑
特集　クモのゲノム，遺伝子研究の最前線

雑感：栄枯盛衰

谷 川 明 男

新海　明さんと「クモの巣図鑑」を作成したとき，その中で使うイエオニグモの網の写真を撮影する必要があった. 新海さんのご自宅の最寄り駅にたくさん網があるということで，夜，きれいな網が張られるのを待って撮影した．しかし，撮影した写真の写り具合を点検してみると, 網に占座しているのはイエオニグモではなくてズグロオニグモであった．しまった見誤ったかと思い，撮影しなおそうとしたのだが，なんと，辺りにあるたくさんの網はみなズグロオニグモのもので, 結局イエオニグモはまったくいなかったのだ. それじゃあということで, 後日, 久留里線の駅をいくつも見て回ったのだが, なんとここでもイエオニグモはまったく見つからなかった. イエオニグモを見るなら駅, というのはもはや通用しないのか．その後，結局は灯台下暗しで，私の住んでいる UR 住宅や最寄りの本郷台駅，その隣の大船駅ではイエオニグモが造網しており，なんとか網の撮影をすることはできた.

さて，今年（2020 年）の 6 月中旬，自室のある UR 住宅の外階段で，イエオニグモに紛れて 1 個体のズグロオニグモのメスが造網しているのに初めて気がついた．その時点でも 14 階から 1 階までで，ズグロオニグモはその 1 個体だけで，そのほかの 10 個体ほどはみなイエオニグモであった. さてその後, ズグロオニグモの数は急に増加し, 8 月中旬になると，網を張っているもののうち半分くらいがズグロオニグモとなり，イ

エオニグモの割合はどんどんと下がっていった．そして 9 月中旬，11 階と 12 階の間の踊り場に造網していたイエオニグモの最後の 1 個体が姿を消すと，もはやズグロオニグモの網しか見つからないようになった．だが，造網可能な区間がズグロオニグモに埋め尽くされているなどといった状態では決してなく，どちらもいない空間がたくさん残っている．イエオニグモがズグロオニグモとの生息場所の獲得競争に負けたというようには見えない．しかしいずれにせよ，外階段は，この数ヶ月でイエオニグモがよく見られる場所からズグロオニグモがよく見られる場所に変わった．

それでもなお，1 階の店舗のひさしではズグロオニグモの姿はまだ見られず，イエオニグモだけが造網している．その後，気になって見続けているが，本郷台駅，大船駅で造網しているのもイエオニグモだけで，ズグロオニグモの姿はまだ見られない．さてこのあとはどうなっていくだろうか．外階段にまたイエオニグモの姿が見られるようになるだろうか．1 階店舗まわりにもズグロオニグモが進出していくであろうか．本郷台駅や大船駅にもズグロオニグモが見られるようになるであろうか．

このような栄枯盛衰はいろいろなところで感じる．ジョロウグモの生息個体数が年によって激しく増減することは，新海　明さんの発表でご存知の方もたくさんおられるだろう．すでにどこかに書いたことだと思うが，以前通い詰めていた西表島でも，通い始めた 1980 代には結構見られたトガリシロカネグモがその後ほとんど見られなくなり，そのころにはまったく見ることのなかったオオハラダカグモがたくさん見られるようになった．神奈川県内でも，1980 年代にはスズミグモはほとんどいなかったし，シマゴミグモ（昔の誤同定を除く）やギンナガゴミグモ（昔の誤同定を除く）も少なくとも静岡県まで行かないと見ることはできなかったし，わざわざ小田原まで採りに行ったチュウガタシロカネグモやマルゴミグモは，今では自宅近くでも見られる．さて，これらのクモがこの先ずっと居続けるのだろうか．あるいは，また見られなくなるようなことが起きるのだろうか．

元気にお暮らしですか？

加 藤 康 子

この頃，しきりに顔が思い出されて，そう尋ねたい人が何人かいる．

今年は庭の木に沢山の蜘蛛がいる．梅雨が長引いたせいでバルーニングの機会を逃したのか，まだ幼いのでこれから飛び立つつもりなのか，どちらにしろ毎日庭を見るのが楽しみだ．

ジョロウグモ，ナガコガネグモ，アシナガグモ，サラグモ，ギンメッキゴミグモ，オ

ニグモ，など，接近した枝という枝に微妙な距離感で網をかけて，お互いに気づかぬふりをしているような，流行りのソーシャルディスタンスということだろうか.

暑い盛り，蜘蛛たちはいつもと変わりなく行儀良く静かに生きている．ところが人間の私は，コロナ禍の中で，あれこれ気を揉んで毎日，焦燥感にとらわれ，そこから抜け出せないでいる．これまで長い年月をかけて作ってきた私の人生の蓄積も，ちっぽけなコロナウィルスにあっけなく略奪され，突然断ち切られることも有り得るのだと思うと，何ともいたたまれない気持ちだ．口惜しい.

この状況で，色々な分野の専門家が集まって意見や戦略を述べ合い，真剣に検討されているはずだからと，いつかは良い提案が実践されて変化が起きると，信じて待っている．けれど曖昧なままの時が長く続くと，意志の弱い私は待ちながらも迷うのだ.

「こうなったら自衛するしかないよね」

と，誰かが言っていた．自分の本能と，在るか無いか解らぬ免疫力を当てにして，なんとかウイルスを回避できるものだろうか．清浄な空気で深呼吸をすれば，肺は鍛えられるのだろうかと，考えは当て所なく揺れている.

この年令になって，未だ潔さも無く，諦められない私は，もしウイルスに罹患したら，防護服を着て懸命に働く，凛凛しい医師や看護師の人達にすがって助けていただこうと思っている.

二年前の夏，肺炎で入院したことがある．専門病院だったので病棟には老人しかおらず時々咳をする人の気配はあったが，日常とはかけ離れた静けさの中にいた．朝夕の抗生物質の点滴が主な治療である．入院した以上はすべてを忘れて身体の再生を促すことだけ考えよう．時間はたっぷりある.

ベッドに横たわって，まずは枕元に好きなソローの日記を春夏秋と積み上げて，一日中読み耽っていた．夕暮れになると，窓枠いっぱいの範囲に見える，間近な木の枝に蜘蛛を見つける．彼女らは網のところどころを修理したり，新しく張り替えたりする．蜘蛛の動きにつれて，フルフルと見え隠れする糸と人が編み物をする指先にも似て，リズミカルな斜め運動を繰り返す蜘蛛とを見ているうちに，いつのまにか小声でささやき合っているかのような錯覚におちる．蜘蛛はあるがままだが，人である私がその楽しげなリズムに同調して，そんな気分になるようだ.

ノックの音がして，若い看護師が入ってきた．夕方の点滴を手に持っている．彼女は私の返事がひそひそしているのに気付いて，自分も声になり「なになに？」と，しゃがんで両手をベッドの枠にかけ，視線の先を見た.

「えっ，蜘蛛を見てるんですか？」

驚いて嫌がるかと思ったが，彼女は別に甲高い声も出さず，淡々と私の横に並んで蜘蛛が網を作っているのを見た.

「あんなに一生懸命に身体を揺らして糸をつないでいるんですね．私，初めて見ました．」

偶然に出会った小さな虫に，共感し，ささやかなエールをおくることへの無邪気なときめきが，眼のなかに浮かんでいた．人が野性の生き物への親しみを持つ機会は興味を感じたときに訪づれる．一瞬で好きになることもあり，足しげく出会いをかさねて，ある日，野性って良いなあと気付いて感動する．

「蜘蛛に関心がわいてきましたか？」

「いえ，えーと　蜘蛛って器用なんだなあって思いました．」

私は笑いながら腕を差し出した．彼女はすぐに看護師の顔になり，アルコールで消毒すると，点滴の針を，あっという間に私の血管に刺した．鮮やかな手さばきで針を固定し，滴下の調節もした．見事な手際である．有能な看護師なのだ．出来る要素を多く持った人はともすれば過剰な，らしさを発しているものだが，彼女には，そんなとりすました自意識は感じられなかった．まわりの空気をほんのりと温める心地よい雰囲気をまとっている．

蜘蛛は横糸を張り終えて，網の出来映えを点検するように　身体をぐるりと回した．やがて納得したのか，チョイチョイと足踏みでもする格好をして，やっと網の中央に収まった．その網を子細に眺め終えると，

「小さな虫なのに，こんなに上手な仕事をするんですね．人は地球上で一番偉いのは自分達だって威張ってますけど，ちょっと傲慢かも知れませんね．」

彼女は微笑んで言った．そして，会釈をし，点滴のトレイを持ち上げ，治療台に乗せると，次の患者のもとへと部屋を出て行った．それにしても，まだ若く，どこか愛らしささえ宿した赤らんだ頬と，有能なのに慎ましやかな佇まいが，とても不思議な印象だった．

それからも数回点滴を射ちに来てくれたが，仕事は的確にこなし，いつも物静かで，自然な優しい眼差しは変わらなかった．消えない残り香のように，二年経った今でも，ふっと気がつくと，彼女のことを考えていたりする．

私の掛付医の先生が言っていた．

あの病院はこの辺では一番の専門病院だからね．重症のコロナ患者をみんな受付けているそうだよ．

「看護師さん！元気にお暮らしですか？」

yasuko